

## 『新しき村』への道：周作人の足跡をたどって

著者	飯塚 朗
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	9
ページ	11-29
発行年	1977-03-31
その他のタイトル	Chou Tso-Jen's Visit to the "New Village"
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/16085">http://hdl.handle.net/10112/16085</a>

# 『新しき村』への道

— 周作人の足跡をたどって —

飯塚 朗

一九一九年（大正八年）周作人は武者小路の「新しき村」を訪ねている。その創設は大正七年十一月であるから、わずか半年ぐらいのちのことである。

『近年日本の新村運動は、世界で最も注意すべきことである。従来 Utopia を夢想する者は少なくないが、着手実行したものではなく、いささか手をつけたものはあっても、いろいろな関係でじきに消滅してしまった』（『日本の新村』）。そんな中で、武者小路の書くものに関心を寄せていた周作人が、この共働共生の理想を実行に移した「新しき村」に異常な興味をもったことはうなずけよう。

一九一九年といえば、中国はその革命史の第一頁をひらいたという「五四事件」の年である。しかしその事件の日、つまり一九一九年五月四日には、周作人にはいなかった。それより二年前の一九一七年には北京大学へ招かれてはいたが、単身赴任であったので、妻子を北京へ呼び寄せるべく、四月に休暇をとって故郷の紹興

へ帰った。そしてちょうどこの休暇を利用して妻を日本へ里帰りさせたのである。もちろん周作人も同道したから、いわゆる「五四」のニュースを耳にしたのは、日本であった。急遽帰国したがすでに五月十八日、北京の落ちつくのを見届けて、七月二日にまた塘沽から船で六日に門司着、その足で「新村訪問」が実現されたのである。この詳細な訪問記が、その年七月三十日、待望の訪問を終えてはっきりとした東京巢鴨村の宿で書き綴られた。

『本年四月の間、私事のために日本へ渡ったが、そのついでに一度日向の新村を見たいものと考えていたけれど、とりまぎれて行けなかった。東京に十数日いただけで北京へもどってしまい、簡単に行ける上野へさえ出かけなかったから、厄介な遠い場所などいわずもがなだった。七月中にまた二度目の「東遊」をして、やっと半月ばかりの暇をつくり、新村本部に四日間滞在、また幾つかの支部も訪ねて、全貌をまのあたり見たただけでなく、ほんとうの人間の生活

とか幸福というものを体験できた。全く私にとってこの上ない喜びであったので、これを書いて記念とする』（訪日本新村記―雑誌「新潮」掲載―「芸術与生活」所収）。

これが『新しき村訪問記』の冒頭の部分だが、「私事」というのは前述の「妻の里帰りのこと」、「とりまぎれ」たのは「五四事件で北京へもどった」こと、「上野」へも出かけなかったというのは、ちょうど四月の花見時だったからであろう。こうして再度の七月はじめの「東游」の一人旅を機会に、この訪問は決行されたわけである。

『七月二日北京を早朝の汽車で発って、午後塘沽へ着き、日本郵船の汽船に便乗して朝六時に出帆したが、七月四日は濃霧に妨げられて、朝鮮海峡に一日停泊、六日の早朝やっと門司に着いて、すぐに吉松行きの汽車に乗った。その日は基隆からきた船もちょうど入港したので、汽車は大へんな混雑、荷物室の戸口には大きなバインアップルが幾つかあって乗客の足蹴にされていたが、誰が落としたものかもわからなかった、そういう印象がはつきり残っているが、その日の情景が想見できよう。門司から吉松へ約二百マイル、大半は山林で、風景は非常に美しかった。八代から人吉までの間は三十マイル、まことに「千峯競秀、万壑争流」という風情、白石と一勝地の両処はことにすばらしかった。汽車は溪流に沿い、まがりくねって進み、両側の車窓は交互に日を受けて、いくつトンネルを潜ったかわからぬが、窓の開け閉めが大へんであった。眼下

の谷間には茅舎が点々とあつて、半裸の子供たちが、列車の通過をながめて、いろんな身ぶりで騒ぎ立てる。こんなところでの生活の苦しさも察しはつくが、この風景に向かつては、古いものへの詩的な感情をおさえきれずに、さながら俗塵を離れた思いであった。事実別の意味からいうと、彼らの生活は、あるいは我々よりもずっと真実で、幸福なかもしれない。但しこれはまたルソーのいう自然生活とは少々ちがう、私が羨むのは良心の平安であつて、自然生活などは我々非生産的な生活を営む者には得られないものである。人吉を過ぎて十二マイルで矢嶽、地図を見ると、ここは海拔千尺であつた。さらに十マイルで吉松に着いたが、すでに七時半、駅前の田中旅館に宿をとつた。この旅館は粗末であつたが気持がよかつた。裏へ行つて風呂を浴び、頭髮についた煤煙を洗いおとすと、からだもさっぱりして、長旅の疲れもすっかり忘れた』

筆者はこれを読んでふと旅心に駆られた。「新しき村」にもあまり関心はなく、周作人も少々読んだ程度、たしかに「新村」を通して武者小路と周作人の間には一つのつながりは感ずるが、大正八年の周作人の旅程をたどつてみたところで、いまさら何にならう。しかし、半世紀以上経つた今、何一つ収穫はなからうが、漫然とした旅に、ちょっと理屈をつけた程度で、いつてみれば周作人の旅のあと、五十三年目の浮気と考えて、三月末日向の「新しき村」への旅を思い立った。

ちょうど東京―博多間の新幹線が開通して、まだまだ混雑がひど

い最中ゆえ、座席指定は買えず、東京駅にはきっかり一時間前にいって並んだおかげで自由席はとれたものの、十時に乗って博多着の十六時五十六分まで、飲まず食わず、通路がぎっしりで車内販売も来ず、ホームの弁当も窓ガラス越しに見るだけであった。周作人の乗った汽車ならパンアップルがころがっていたらうにと、まず半世紀の差をつくづく思い知らされたのである。

前述のように気まぐれの旅だし、混雑に辟易したので、博多で一泊、翌朝早く出て熊本から天草五橋のバス旅行を試みて、熊本へもどってぐっすり睡眠をとってから、そのあくる朝七時五十六分の「やたけ一号」で、八代經由人吉に向かった。周作人のいう鹿児島線は今の肥薩線廻り、八代から鹿児島本線に別れて山側へ入ると、周作人のいう美景はまだまだ十分残っているのに驚いた。もちろん球磨川に沿ってハイウェイなどあって、昔の面影など薄れたのかもしれないが、車窓の右になり左になって溪流がつづき、トンネルの数も多い。ただ昔のように汽缶車があえぎあえぎのぼるのでないから、窓の開閉にあわてる必要はなかったし、煤煙を気にすることも要らなかつた。しかしここを急行にしたのは失敗であつて、周作人のいう白石も一勝地の駅もたしかにあつたが、吊橋のようなのがかかり、河中の石のたたずまいが面白かつたと思つても、ゆっくりカメラにおさめる暇もなく、八代—人吉間の五十一・八キロを一時間ほどで突っ走ってしまった。

筆者は人吉で下車した。次の鈍行に乗ろうと思つたからだ。しか

し人吉着が九時二十八分、鈍行まで三時間以上あつた。周作人はこゝを素通りしたわけだが、小さな駅に降り立ってみて、観光客など見当らぬ静閑な環境を快く思つた。新幹線開通で博多へおし寄せた客たちも、有名コースへ散ってしまった、ここまでは来ていないらしい。筆者だつて片々たる知識しか持っていなかつたが、それでも浄瑠璃の「落ちゆく先は九州相良」、哀調「五木の子守唄」、平家の落人「五家荘」、人にもらつた球磨焼酎などが走馬灯みたいに浮かんできた。しかしまっ昼間から焼酎を飲むわけにもいかず、駅前のこれも閑散とした観光案内所でパンフレットを買つてみると、五木や五家荘は時間的にも無理とわかつて、球磨川沿いをぐるりと歩くことにした。まず駅裏の横穴古墳から、重要文化財の青井神社、武家屋敷を通過して相良神社の境内で、途中で買ったザボンを食べた。そのあと裏の人吉城址にのぼる。ここは相良二万二千石の居城であつた。球磨川の南岸にあつて、天然の要害という感が深い。建物は明治維新に全部破壊されたようで何も無いが、武者返しの石垣だけが完全に残っていて、杉木立とすでに葉桜の小径を本丸まで登つてみたが、一組のアベック以外は誰にも会わなかつた。礎石と石垣と、石以外すべてが朽ちはてていることを、かつては三日月城とロマンチックに呼んだのかと思うと、文字通り今昔の感に堪えなかつた。眼下に見おろす球磨川の流れは早く、このどこかから有名な球磨川下りができるのだらう。水の手橋が街中へ伸びていて、いくつかビルディングこそ見えるが、この人口五万に足りない人吉の

街並が、手にとるように見渡された。その向こうにかすむ山なみが、五木の里か五家荘かと、筆者は旅心の定まるのを覚えながら、河原へくだった。

人吉を十三時十七分の鈍行に乗った。列車にはちがいないが、他は全部貨車で、客車は一輛しかなかった。乗物とは混むもの、とばかり心得ているわれわれには、まずはおどろきであった。一輛の客車なのになら空きである。次のおどろきは、これがループ線であったことだ。ループの知識はゼロだったが、ゆるい坂道をのぼりながら山を一回転する方法だそうである。つまりラセン状に山腹のトンネルをくぐり、一回転すると、そのくぐったトンネルの上に出るという仕組みなのだ。人吉を出て球磨川に別れて山地に入ると急勾配がつづくが、周作人はここをまだ蒸汽機関車で喘ぎ喘ぎのぼったのだろう。いまは大畑、矢岳、真幸と三つの駅を經過して一時間二十分、この急勾配の故に、昭和二年に鹿兒島本線の座を失って、いまはローカル線に転落することになってしまったようだ。しかしこの鈍行の一時間二十分は、筆者にとつてはこのうえない快適な時間であった。他客はどこで降りてしまったのか、買切ったような客席を、車窓の風景につれて、どこへ移動しても自由であった。ことにループ線の操作のためか、真幸の駅にながいこと停車したが、プラットホームに白く輝く砂が敷きつめられて、箒の目がまるで京都の龍安寺の石庭のように縞目をつけている。長停車ゆえ降りてみたが、白砂を踏むのに気がひけた。駅長が出てきていろいろ話してくれた

が、このごろこの寒駅の切符がかなり売れているという。北海道の幸福駅、銭函駅と並んで、駅の切符にまで「しあわせ」や「金儲け」を頼る世相は、一体何を意味するのだろうか、ふと現実に戻された。

吉松着十四時三十七分、乗換時間が三十分以上あったので、周作人の泊った田中旅館をたずねた。たしかに駅のまん前に旅館はあったが、吉松荘とあって名前がちがう。正面から見ると、古びた瓦屋根だが、側面にファンタの青とコーラの赤に囲まれて、温泉マークがついた看板がみえた。通りの二三軒先にスーパーマーケットがあって、その主人が吉松荘を経営しているのだときいて訪ねてみると、たしかに田中旅館を引継いだ、もと田中旅館のお婆さんだけが、その先に一人で暮らしているとのこと。古ぼけたその家を訪ね当てる、玄関を開けたが返事もなく、土間の奥の障子越しに声をかけると、そこをどうぞ開けてくれという。障子を開けると、暗い部屋に、老婆が一人まだ炬燵にあたっていた。痩せた白髪の老婆は耳が少し遠かったが、大声を出せば話は通じたものの、彼女の若いころにその旅館に一人の中国人が泊りはしなかったかと訊いたところで、覚えてはいるわけがなかった。全然記憶がないとの答えは少々向こうも困惑の態にみえたが、そんなことを訊ねたこっちも、いささか恥ずかしい思いがして、どうして一人で住んでいるのか、身寄りはないのかなどもうせ、んさくする余裕もなしに、ではお元気で、といのこしたまま早々に駅へもどってしまった。旅の疲れを癒し

た五十年前の周作人とは似もつかぬ、田中旅館のもと娘さんとの出会いはあった。

『吉松は鹿児島県下の一つの小駅で、山ふところにあつて極めて静かだが、鹿児島線と宮崎線はここで乗換えだから、昇降客はかなりある。しかし街は小さくて、私が既成の浴衣を買いだと思つたが、どこにもなかったし、そのうえ専門の衣料店はなく、やや大きな雑貨店に幾つかの衣料が並んでいるだけであつた。鹿児島方言はもとよりわかりにくく、汽車の中や旅館では東京語が通じたけれども、原地人はやはり方言を使う。商店で物を買うときは、再度聞きなおして、あるとかないとか、いくらだかを理解する有様であつた。雑貨店の女は客を見て東京語を使ったが、彼女の言葉はどうもわかりにくいし、田舎者が町の人に遇つたみたいで、とてももじもじした様子であつた。事実一つの国語が通用していれば交際に便利だが、ほかの方言もそれぞれ美しいもので、その自由な発展にまかすべきだ、形式的な統一主義はもはや過去の迷夢となり、現在は議論する価値はない。将来時勢の要求で、国語にさらに人類共用の世界語を加えるのもよからう、他のいろいろな方言はその自然に任せてこそ正しい方法であり、それは言語のみにかぎるまい。多くの事もそのようにすべきと思う。』

周作人がこんな所懐をつけ加えたのは、鹿児島弁がよほど耳に珍らしく響いたせいでもあろうが、彼のいうように現在も吉松の街は小さく、スーパーマーケットはあつても、周作人のいうような専門

衣料店は見当らなかつたように思う。

『七日の朝は雨が降つたり止んだり、出発を渋つたのだが、昨日博多駅から「新村」へ電報を打つて、日時を約束してしまつたので、遅れてならじと、九時半に吉松を離れ、午后二時に福島町に着いたが、ここまで七十八マイル。ここから乗合馬車の切符を買つて、高鍋までが日本里で三里、中国の約二十里にあたる。まるまる二時間かかった。ここはもう日向の国、宮崎県に属し、九州の東南部、一方は海、一方は山林で、馬車はその間を県道に沿つて進んだ。私はこんな未知の土地に来たのに、かえつて以前に知つてゐるみたいに楽しい気持ちに駆られた。我々はみな「地の子」ゆえ、どこへいっても、平和で美しい土地なら、知つてるような気がするのだから。高鍋に着いたらまた雨が降り出した。私は馬車屋の門口の棚の下に立ち、高城ゆきの馬車に乗り換えようと思つて、ふとみると、労働服を着た人が近寄つてきて「北京から来られた周さんですか？」と訊いた。私が「そうです」と答えると、「僕は新しき村からお迎えに来た者です」と彼がいった。そばにいた粗末な服の青年も近寄つて握手し、「僕は横井です」という。つまり横井国三郎君、もう一人は斎藤徳三郎君であつた。私は日向に入つてからも興奮していたが、この時さらに感動を覚えて、どういっていいかわからぬながら、平日夢想していた世界がすでに到来したことを、この二人がまず告げてくれたような気がした。現在は依然として旧い世界に住んでいますが、この一部の奇蹟によつても、私の信念をさらに堅固にさせ、

将来必ず全面的に成功する日のあることを信じさせるに十分であった。我々は常に同胞愛を感じるが、同類愛を感じることは少ないのだ。この同類愛の理論は、私はいつも考えてはいるが、経験となると、はじめてなのだ。「新村」の空気の中には、この愛が充滿しているのだろう、だからかえるのを忘れるほど酔わせるのだ、まさに驚くに足りぬ奇蹟ともいふべきだろう。』

周作人が宮崎線というのは、現在の吉都線をいうのだろうか。都城經由で日豊本線につながって宮崎へ出る。しかし今はこの線のどこにも福島町という駅はない。当時はまだ別府方面へ抜ける海岸線はできていなかったが、宮崎市より北へいくらか線が延びていたのか。現在の佐土原町より北、つまり一ツ瀬川沿いに福島という町があるが、そこに駅があったのではないかと土地の人はいった。現在は日豊本線の、宮崎から五つ目に高鍋駅がある。筆者が駅前の広場に立つと、いかにも田舎町の閑散たる風情であったが、さすがにもう馬車屋とてなく、周作人の訪れた当時を偲ぶよすがもなかった。周作人はこの高鍋で「新しき村」の横井、斎藤両君に出迎えられたことがどんなに嬉しかったか、ここでの文章でも想像がつくが、のちに書いた『小河与新村』でもこの部分を再録していて、彼の興奮状態がよく窺われる。筆者が宮崎の宿を出て高鍋へ着いたのは九時四十九分、その日は別府に宿をとってあったので、再び高鍋へもどって十三時三十一分の急行に乗るつもりであったから、三時間はどしか時間がなかった。石河内へ行くバスはあっても一日何本も出

ていない由、ハイヤーを雇うより仕方がなかった。

『斎藤、横井の両君と私は高鍋で馬車を雇って、高城に向かって出発し、横井君の乗ってきた自転車は馬車の右側へ縛りつけた。というのは博多で打った至急電報が、二十四時間かかってやっと村へ届いたので、みんな大騒ぎ、横井君が先に自転車で福島町駅に行った時は、汽車はとっくに着いて、馬車も出てしまったあと、そこで再び高鍋に引返してちょうど遇えたというわけである。我々の馬車が高鍋を出てじきに、武者小路実篤先生と、松本長十郎、福永友治の両君が出迎えにきてくれたのに出会って、一緒に馬車に乗り、二里余り（中国の約十二三里）で高城に着き、深水旅館でしばらく休息した。この旅館の主人深水桑一は五十何歳の老人で、本業は薪炭を扱っていたが、旅館も経営していた。「新しき村」の人が日向で土地を探した当時、ここにひと月余りも滞在したそうだが、彼はこの計画をきいて共鳴したから、「新しき村」に往来する人にも好意的で、すこぶる歓待した。我々はしばらく閑談し、飯を食べてから、横井君が旅館裏の大きな谷川へ魚とりにゆき、十尾の鱸と一匹の蝦を捕えたが、経木で編んだ帽子をとって籠にして、縄で口をし

ばったのが、とても面白かった。』

筆者はこの八キロあまりの道をハイヤーで突っ走ってしまったが、周作人は雇った馬車で、もっと悪かったらう山道を揺られながら行ったにちがいない。そしてじきに、彼を出迎えにきた武者小路らに出会っている。以前文通こそあったが、武者小路との出会いはこれ

が最初であったはずだ。それにしてはこの個所の描写があまりに簡単すぎるのが少々腑に落ちない。斎藤、横井との出会いをのちのちまで興奮して書いているのに、「新しき村」の主唱者である武者小路がわざわざ出迎えに出てきてくれた、もっと感激が大きかったように筆者には想像されるのだが、こちらもはるばる中国から来た客、むこうは途中まで出迎えた主人側となれば、当然のことという考え方が中国的なのか、あるいは興奮するほどに冷静を装うそれが周作人の性格なのか、どうも筆者にはわかりかねるところである。

高城はいま木城町きじょうとなっていて、筆者はその町役場へ行って深水利館をたずねたが、いまやこの町に旅館は一軒もないとのこと。しかし世帯数が千数百、人口六千ほどの木城町のこととて、深水さんならず近くだからと、役場の人が親切に案内してくれた。すでに孫の久和雄さんの時代で農業を営み、そのお母さんはもう年老いていられたが、周作人の時と同様、相変らずの歓待ぶりで快かった。もちろんそのお母さんは田中旅館の老婆と同じに、周作人のことはさだかに覚えてはいなかったが、旅館をやっていた当時のものを、いろいろ出してきて見せてくれた。武者小路の直筆の軸などあったが、筆者には、当時「新しき村」の会員川島伝吉の描いた河辺の深水利館の油絵が珍しく、その場所をたずねると、久和雄さんが案内してくれて、屋後から歩いて小丸川こまるの堤防へ出ると、河州の砂利を指さした。護岸工事が完了して、深水利館跡はいま小丸川の中に没してしまっただけである。

久和雄さんの厚意で「新しき村」へ電話連絡をしてくれたそうだが、彼は時折は村を訪れているようで、ちょうどその日も用があるからと、自家用の小型トラックで、筆者のハイヤーと前後して、石河内へ向かった。

『六時半そろって出発、おのおの提灯を持った。高城から「新しき村」のある石河内村までは三里ほど（中国の十八里強）、峠を一つ越えねばならず、三時間はかかるので、村に着くのは真暗になるからである。雨後の山路は馬蹄に踏みくだかれてところどころ歩きにくかったが、さいわい上りはそう急でなかったから、六人は談笑しながら、さほど困難を感じなかった。ただ雨がまた落ちてきて、麦藁帽子の縁から点々と滴り落ち、洋服も大半濡れてしまつて、松本君の単えひとの上衣はびしょりだった。八時ごろ山頂を廻ったときは、空もようやくまっ暗、路傍の小店でしばらく休んで、サイダーやら清水やらで咽喉のどをうるおし、蠟燭をともして、また歩き出した。しかし提灯は雨に濡って紙もだめになり、斎藤君の燭台は中途から脱けてしまい、武者先生の竹と紙は分離して提げられず、両手で支えながら歩くより仕様がなかった。私のも初めはよかったが、あとになると同じ状態だった。先刻はみんな笑いながら、この沢山な提灯はまるで提灯行列などといっていたが、いまはもう半分残っているだけ、路を照らすのさえ不十分だった。下りは遠廻りだが平坦な路があったが、時間がもう遅かったので、小路を歩くことにした。この路は急で、ところどころは道なき道、清水が流れるところで、



そのうえ雨のあとだったから、大きな石がごろごろして歩きにくく、それに脚ももう疲れていて、躓きながら歩く始末、それでも一生懸命前進したけれど、とうとう列は乱れてしまった。前の一隊が時に立ちどまって大声で我々を呼んだ。麓の「村」人が、灯の光を見、呼び声を聴いて、また大声で「オーイ」と叫ぶ。これらの声の主は、私にはその時はわかるはずもなかったが、山上山下の呼び声を耳にして、私は勇気を与えられ、自分を支えることができた。麓へ着くあたりで「村」人が沢山暗の中で出迎えてくれ、あわただしい中で誰が誰やらわからなかったが、ただ傘をもってきてくれたのが武者小路房子夫人、外套を着せかけてくれたのが川島伝吉君と記憶する。石河内に着いた時はもう九時半で、武者先生の家に入って、衣服を借りて湿った洋服と着換え、二階に集まって話した。この部屋はもともと武者先生夫妻と養女喜久子、松本君と春子夫人、杉本千枝子君の五人が同宿していたところである。その時「村」から来て会ったのは、萩原中、弓野征矢太、松本和郎の諸君で、みんな茶を飲みながらよもやま話、小さいお饅頭と、私が北京から持っていた乾し葡萄をたべながら瞬く間に十二時になったので、各々散じていった。その一日身体は大へん疲労したが、精神はかえって快かった。だから安らかに睡れて、眼がさめると、隣りの農家の婦女がもう円い笠をかぶって野良仕事に出ていくところであった』

周作人の訪問の折は雨だったし、それに夜の山道で、どんなにか印象が強かったらうと思う。したがってこの「村」へ到着のくんだり

はなかなか印象ぶかく書いてある。筆者の場合は天気もよくまっ昼間でハイヤーを飛ばしたのだから、この五十数年前の困難やら喜悅やらを如実に味わうすべ、とてなかつた。ただ途中で道路工事で一時停車に出あい、長いこと待たされるはずだったのを、深水久和雄さんが同行してくれたおかげで、工事人と談合してじきに通してもらえたから、予定通り「新しき村」へ到着できた。ハイヤーの運転手に、「ここです」といっておろされたところは、満々と水を湛えた小丸川の河畔であった。昭和十三年のダム建設によって「新しき村」の大半がこの水底に沈んだそうだが、その深潭が、周囲の緑を溶かしたように、微波を立てて激んでみえた。ここから右へいくと初期に武者小路の住んだ石河内の部落で、その向こう側から細い山道を辿らねば、現在の「新しき村」まではゆかれぬという。ハイヤーの運転手はここまでで引返すつもりだったらしい。しかし深水さんを訪ねたおかげで、すでに河岸には「新しき村」からの若者が一人、河畔に渡し舟を用意して待っていてくれた。ハイヤーは待たせておいて、筆者は久和雄さんと一緒に小舟で渡してもらった。まるで山深い神秘の湖を渡る思いであった。櫓の音は静かだ、小舟が迂回して島のように平坦な場所へ着く。ここが城である。かつて大友氏の出城のあった趾だそうだ。戦国の世、大友宗麟は島津氏と争い、日向耳川の戦いで大敗を喫し、大友氏滅亡の因となったというから、その折に廃墟となったままかもしれない。静寂の中で鶯の声がした。「自分たちは舟で城に渡った。自分たちの土地に」(武者小路実

篤「土地」そうした感慨もすべて静寂の中にあつた。ここから小徑を登り、山上のまた平坦な場所へ出ると、田畑がつらなり、眺望がひらけて、かなたに幾棟か瓦屋根、現在そこが、「新しき村」のたつた一つ残つた、杉山正雄氏とも武者小路房子さんの棲家なのであつた。北西が尾鈴山の方面なのか、緑の山なみに接し、南東を小丸川が遶るのだろう、春光のどかという感じで、木柵の中に牛が一頭うずくまっていた。

その木柵を右に折れた奥にある棟に案内され、土間に作りつけの腰掛のついた応接間とおぼしい場所で、杉山氏にいろいろお話をきいた、といっても、前述したように筆者は「新しき村」を調べにきたのでもなし、国文学者でもなし、それに周作人が訪問当時、杉山氏は「村」にいなかったから、周作人の名前は知っておられたが、周作人の当時の印象など聴くすべもなかった。房子さんはあるいはおぼえておられるかと思つたが、ずっと離れた奥の棟で、いまは寝たり起きたりということで、無理におしやるのも不慮慮と心得た。それでも使用人のおばさんがお茶をはこんでくれて、これは奥さまがいれたものとのこと、その御厚意に感謝した。ひよっとして周作人の房子さん宛手紙でもありはしまいかとたずねたら、この一通だけと差出されたのは、ただの年賀状で、「新禮」としか書かれていなかった。周作人がこの旅行記に書いている「村」人十九名の名前を書き留めていったのを見せたが、杉山氏の知るかぎりでは生存者はほんの数名で、あとは故人になつたり、消息不明者であつた。

ただ「養女喜久子」とあるからはまだ生存していると思つたら、これは実は志賀直哉夫人の娘だった人で当時引取つたのだが、すでに死亡しているとの話であつた。半世紀ともなれば変化は当り前のことながら、立錐の余地もない新幹線に乗ってきた筆者の眼には、窓越しの春風駘蕩は一瞬の時間の停止にも思われた。

『八日午前、二階でヴァン・ゴッホとセザンヌの画集を借りて繙き、午後は武者先生と「村」へ行ってみた。門を出て左へ歩き、また右折して、田のあぜに沿って河辺に出る。この河の名が小丸川、曲折して流れ、水勢はすこぶる急、あちこちで水石相搏つ有様で、危険な浅瀬をつくっていた。「新村」の所在はもともと古い城趾で、土地の人は城じょうと称し、半島のように、川の水は蹄鉄型に三方を囲い、中央の一角がやや緩い流れになつていて渡ることができた。河幅は四、五丈、しかし大へん深く、水の色は青黒く、竹棹でさぐつても底には届かなかつた。河を渡つて山へのぼっていくと中城なかじょうで、村の住居はここに在り、右手が馬小屋と豚小舎、左手下に遠く一軒の家があるが、まだ竣工していなかった。我々はまず家の中で休んだが、そこで遇つた人は昨日の顔見知り以外は、佐後屋、土肥、辻、河田、宮下町子、今西京子の諸君であつた。この家は近村の農家の旧い草舎を買つて改造したもので、十畳間ぐらいの大きさのもの三間、これが共用の居室となり、ほかに台所と図書館の二間があつて、女はまだ新築ができないから、馬小屋の二階に住んでいた。この家の前に新しく広い道がついていて、すぐに水辺に達して、洗濯や水汲み

に便利なようにしてあった。さらに右に行くとも一面の沙州で、有名なロダンの岩はここにあり、水の浅い時は涉っていかれるが、現在は水中に浸っていて、まるで一疋の蝦蟆がま、まさに天然の彫刻といえる。家の裏から石段を上ると上城かみじょうで、畑ばかり、豆、麦、玉蜀黍、茄子、甘藷の類が植えてある。右手に古い茅屋があるのは、斎藤君の住居兼仕事場であった。一応見てからまた石河内にもどり、ゴヤの画を繙いたが、ナポレオン時代の仏西戦争と闘牛の二巻があつて、驚心動魄、人の運命に対して思わずいろいろな感動が湧き、心の平和を失った。夜、川島、萩原の諸君が「村」からやってきて、二階で話しこみ、十二時ごろ帰っていった。

「新村」の土地は全部で八千五百坪（中国の四十五畝う余）、「村」に住む者は、その時すべて十九人、ほかの幾人かは帰省していたり、病氣療養中で、「村」から出ていっていた。家畜では馬一頭、山羊三頭、豚二匹に犬が二匹、ミチ、ベビーといつて、中国でいう牛犬の一種、その他に鶏が数羽いた。その犬は大へんかわゆくて、二度目に私を見ると、もうおぼえていて、一斉にとびついてきて、私の浴衣にしゃれて泥まみれにしてしまった。その二匹の豚にしてもよく人に馴れて、近づくとも柵の間から嘴を出してきて食物をねだる。我々はまだ肉食を断たぬが、それを見ると殺してその肉を食うに忍びなかった。現在「村」での生産は鶏卵だけで、それも依然足りずに、石河内の農家から買い足さねばならず、はじめは一個一錢五厘だったのが、次第に値が釣上つて四錢になった。これは物価騰貴の

影響もあろうが、大半は土地の人の誤解にもとづく。「村」の彼らは金持ちで、農業を娯楽にしているのだから、幾らか高くしたつてかまわぬと思つているのだ。この土地の気風はよく、「新村」はいうにおよばず、石河内村も「夜戸締りをしない」とは称讃に価するが、ただ因襲的な偏見は免れがたく、官吏や批評家ともなるとなおさらだった。石河内の区長もいくらかの田地を下城しもじょうに持つていて、「新村」が買いたいと思つたが、時価の二倍でなければ売らないと区長はいつた。その実じつ彼も金は十分持つてゐるのに何でこゝ細かいのか、どうせ邪魔しようとの魂胆なのだろう。金持が天国へ行こうとするのは、ラクダが針の孔をくぐるよりむしろかしいとキリストはいつたが、その通りで、彼らは依然悟らないのであろう。

「新村」の農作物はいくらか収穫はあつても自給には足りず、副食物の補助となるだけである。もう三年か五年もすれば、土地もさらに拡張、野良仕事も経験を積むから、自活し、独立の生活をする希望も持つてゐるが、ここ数年は外部からの寄贈に頼つてやっと支持できるのだった。各人毎月米麦で六円（中国の約銀三元半）、副食物一円、小遣いが一元、それに別の雑費をいれて、全部の予算が毎月二百五十円。この経常費は、各地の「新村」支部の寄付金があつて、大体收支つくなうが、土地、建物、農具などの臨時費には、特別の寄付と、武者先生の著作の収入などの金を待たねばならなかった。私が「村」にいたとき、武者先生が我孫子あひまごに新築した家を売却しようとしてゐる話をきいて、惜しいと思つたが、しかしその金がさら

にいいことに使われるなら、心残りもないのだろう。「新村」の本部は日向（詳しくいうと日向国児湯郡木城局区内）にあり、その他は東京、大阪、京都および福岡、北海道にそれぞれ支部があって、協力して「新村」の発展を謀ることになっている。会員は二種に分かれ、「村」に入って工作に協力し、本会の精神に依って生活することを願う者は第一種会員、心から本会の精神に賛成するが、事情でそうした生活を実行できない者は、第二種会員である。第一種会員の権利義務は一律平等で、共同で労働する、平常の衣食住および病気の時の医薬などの費用は、均しく公共負担になる。第二種会員は会務の為に尽力するほか、毎月五十銭以上の寄付をして「自分の生活上における悪を懺悔する」ことにする。これが現行の会則の大要である。現在の情形からみると、この「新村」の経済を何とか支えられるのは、世間の同情もすこぶる大きいのだが、ただ千百年来の旧制度旧思想が深く人の心に食い入って、すぐには改まるものではないから、一般の冷淡と誤解も免れがたい。しかしこの「新村」の精神はけっして誤りはないと私は信ずる、たとえ万一失敗しても、その過ちはけっしてこの理想が充実してないということではなくて、要は理性の不成熟にある。「求めるものは、何でも求めよう」しかし準備がちがえば、結果は大いに異なる。「新村」の人は、従来暴力を用いなければできないことを求めているのだ、平和的な方法で得られれば、一般人の側からみると、いかにもわが意をえたというところにのみならず、しかし彼らの苦心もまさにそこにある。中国

『新しき村』への道（飯塚）

人の生活もまともではないが、ある者はただ他国と似たり寄ったりで、そうひどいともいえない、しかし社会情勢と歴史事蹟とからみると、危険きわまりない、でも暴力は絶対に使ってはならない、だから私は「新村」運動に対して、中国の一部の人々の為を思つて、一層心から賛同する次第なのだ。』

ここに「有名なロダンの岩」と出てくるが、この「城」の土地が「新しき村」に決定された日がちょうど十一月十四日、オーギュスト・ロダンの誕生日に当ることを幸運と感じて喜んだそうだから、「ロダンの岩」は「新しき村」の象徴とも思われる。その「ロダンの岩」を噛む急流を、石河内村の側から流れの緩いところを選んで小舟を渡して「新しき村」へ入って、「村」人たちと閑談しながら、刻明なメモを周作人はとったのであろう。創設半年の「村」の状況が、一中国人の眼を通して描かれる。どの程度正確か、思いちがいもあるのかどうか、それは筆者にはわかりかねるが、周作人という人物がまさに五四文化革命の闘将となったその心底に何があったか、「新しき村」運動にこうまで心酔した説明の中にそれが潜んでいそうなのがするのである。

『九日午前、横井君が来訪して、自作の詩「自然」と「小児」を贈ってくれた。彼のいうことはいろいろもっただったが、しかし中国が一番自然で自由な国だというのは、讚めすぎである。午前中に武者先生、松本君らと河を渡って中城に行くと、ちょうど熊本第五高等学校の学生五人が「新村」を訪問したところで、一緒に飯

を食った。純然たる麦飯をはじめて食べたが甘美、副食物は味噌（一種の豆製の醬<sup>ジャン</sup>）、昆布の煮付け一皿、煮豆一皿であった。食事が終わるとみんな仕事に出たけれど、各自自分の力量に随って、決して一定の制限はないが、誰一人サボる者はいなかった。「新村」の生活は極めて自由だが、一面また厳格なところがあった。「村」人の言動や仕事と休息は、すべて自ら責任を負い、規定は何もなかった、人に迷惑さえかけなければ、一切自由であった。しかし自発的な制裁というものは法律よりも何倍か厳しい、だから一人一人は独立していて、かえってまた同一の軌道の上を歩いて、協同の生活を営むのである。日常の労働は、個人の利益の為ではなく、また労働を売って、他人の為に仕事をするのでもなく、ただ自己と人類に対する一種の義務としてやるのである。だから仕事する時には、私利的な計画も予測もないし、いやになったり、あきたりすることもないのである。彼の単純な目的は、ただ仕事をするようになる、すなわち仕事をするということである。一種の満足と愉悦にひたるのである。工場労働者が十数時間働いてのち家に帰るのは一種の愉しみとは思いますが、この心情は、監禁期間の満ちた囚人が監獄の門を出た光景と同じで、まことに憐れむべきだと思う。義務労働は自分の生活の一部分で、この労働を遂行する愉快さは生理的な満足に比せられる。しかしこの要求はまた愛と理性に本づくもので、本能を超越する——つまり人の性と衝突しない——それ故からただは労苦しても、良心の慰安になりうるのだ。この精神上の愉快さは、経験した者で

なければわかるまい。「新村」の人たちはほんとうに仕合わせだ！世の人々とこの幸福を分け合うことを私は願う者である！

その日彼らは上城の仕事に出かけたので、私も同道した。小麦を植えた畑に、もう多くの甘藷を植えてあった。まだ植えつけの済まないものが三分の二ほどだったので、各々上衣を脱ぎ、シャツと半ズボンに靴下といういでたちで発掘をはじめた。私は第五高等学校の学生たちと、まねして掘りはじめたが、鋤がとても重く感じられて、一生懸命に掘ってみたが、深くは掘りおこせず、半時間も経たないのに腰が痛くなり、右の掌にまめができてしまつて、鋤を抛り出し、豆の畑へいつて草を抜くより致しかたなかった。ちょうど松本君が一籃の甘藷の苗をもつてきて、私に植えつけを手伝わせただ。まず甘藷の苗を六、七寸の長さに切って地上に横たえ、手で土を掘って埋め、芽を二寸余り地面に出すのである。この仕事は容易で、十数人で三時から六時まで、掘ったり植えたり、残った空地全部を植えおわつた。みんな下城のロダンの岩のほりへ来て手や顔を洗い、石に腰をおろしていると、犬のベビーが水をもぐつていて石を拾ってきた。私も水辺で二つの石を拾ったが、一つは緑色、一つは灰色で、中間に一条の白線がついていた。その後高城にいった時、また山中で花紋が襷<sup>たすき</sup>になっている石を拾ったが、いまま私のカバンに入っており、この日向の快游の記念である。中城へかえって芝生の上で麦飯をたべ、寓所へもどると、疲れこそ覚えたが、精神は爽快で、三十余年来経験しなかった充実した生活だったと感

じた。半日だけだが、この世の善悪を超えて「人の生活」の幸福というものを識りえたのは、まことに最大の悦びであった。そのうえ一つの理想が平常は夢みたいな考えた、実現はできないと人に笑われることが多いが、「不可能」なんてことはない、これこそ人類同胞の考えていることなのだ。我々はふだん自分の利益のみを考え、謬見を抱いて、人を損なわなければ己を利することはできないと思っている。別人つまり別姓別県別省の人に遇うと、すべてこのようだから、別国の人はなおさらである。もし心の中でいかに他を損なおうと図らぬまでも、ねたんだり恨んだりして、自分が損を蒙るまいとする。それゆえ互いに「剣を抜き弩を張り」、互いに蔑視する。もし人類共存の道理、独り楽しむことと孤立することは最大の不幸であるとわかれば、同類の互助をもって異類と生存を競うことこそ正しい方法であり、並んで耕やし、一緒に仕事し、苦楽を共にすれば、何処の人だって隣人だし、兄弟なのである。武者先生はかつてこういった「何処であろうと、国家と国家が、たとえ仲違いしていても、人と人との交情は、友好をつづけることができる、我々が人たる所以は、互いに助け合つて仕事をするのである」(「新しき村」第二年七月号)。この言葉は甚だ道理にかなない、けして不可能な空想ではない。私が「村」に滞在した間、「敵国貴邦」とかいうやりとりはもうなかったが、終始客人として優待されたのは、これも差別待遇である。一旦野良仕事にいくと、故郷の田園の中で畑を掘り花を植えているような気持で、彼らも私を「村」の中の一人の労働者

として、少しも区別はなかった。このように打ち解けた感情は、実際に経験しなければ理解できないであろう。まだ「汝即我」という一体の境地には到達しなかったが、この経験から、この理想の可能性と実現性をほば証明できた。それがまた私の大へんな喜びと光栄であったのだ。

私の最初の計画では、十日に村を去るつもりだったが、脚力がまだ回復していない為に、一日延ばさざるをえなかった。そのうえ「村」に入って以来、大へんに気持よく、もう何日か逗留したいと思った。もし東京へ早く行かねばならない用事がなかったら、きつと十一日も「村」を出なかつたかもしれない。武者先生は私が「村」の中に植樹して記念にしたいといい、翌日植えに行く約束だったが、夜になって急に風雨がひどくなり、翌日も止まなかつたので、ついに行きできなかった。武者先生は一卷の白布をもってきて、私に幾つか字を書いて、植樹の代りにせよという。私の書法などは、学校時代あまり得意でなく、その後も習字などしなかつたので、大文字を横書きする資格はなかつたものの、いまは記念としてだから、問題にしないでよかろう。「村」への一幅は「子曰、仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣」で、武者先生への一幅は「子曰、内省不疾、夫何憂何懼」であり、この二句とも武者先生が選んだものであった。彼はもともと私に愛読している詩を書いてくれということだったが、私はたまに陶淵明の詩を好んで読んでいたが適當な句が思い出せなかつたので、武者先生が今ちようど耶蘇と孔子を研究していて「論

語」が手もとにあったから、この二句を選んだのである。房子夫人の綾絹に私の「北風」の詩を書き、またこの詩の日本語訳を松本君に一枚書いて贈った。「村」の川島、萩原両君が雨を冒してやってきて、二階で閒談した。午後になって雨が一そうひどくなり、小丸川の水勢が増すと渡るのに大変なので、彼らはあわてて「村」へ帰っていった。夜松本君と旅程を相談した。彼がちょうど帰省しようとしていて、私も東京へ行くことから同行を約束し、彼の紹介で、順路各地の「新村」支部、大阪、京都、浜松、東京の四カ所を訪問するつもりにした。途中には福岡、神戸、横浜の三カ所があったが、時間がないので、割愛するより仕方がなかった。

十一日も相変わらず雨、午前八時、松本君と出発したが、各々単えの着物に木綿の靴下で、カバンを背負うといういでたち、私の洋服と皮靴は別に一包みにして、武者先生が背負ってくれた。房子夫人、春子夫人、喜久子、千枝子の二君も同行して、高城まで送ってくれた。「村」の諸君は、小丸川が増水したため渡って来られず、我々が坂を登って行って見ると、あの蝦蟆型のロダンの岩はもう全く水中に没して、尖端がちよっと見えるだけだった。山上と村の中で互いに呼び合う、まるで数日前村に着いた時と同じ光景だった。しかし時間がもうないし、山路もまだ遠いので、我々は手を振り送別してくれる村人から遠去かり、道を急がねばならなかった。懸命に山を登って嶺へ出ると、路はやや平坦だが、雨のたまり水があつて、深さ一尺ほどの箇所もあり、ぬかった場所は至る処にあつた。十一

時に高城に着いて、深水旅館で休んだが、昨日発った佐後屋君がまだ逗留していて、聴けば高城、高鍋間と、高鍋、福島町の間の木橋が、鉄砲水で橋桁を流され、交通が杜絶えているとのこと、我々も高城に滞在するより仕方がなかった。二階から高城の橋が右手に見えるが、橋桁が一つなくなっていて、橋は中間で折れているが、さいわい途中で支えられているので、人はまだ通れる。馬車に乗ろうとすれば、どうしても橋を渡らなければならないのである。十二日の早朝、松本君が馬車屋へ行ってきいてみると、高鍋、福島町の間の橋はまだ決壊していないようなので、出かけることにきめた。私は松本、佐後屋の両君と、一台の馬車を雇い、武者先生、千枝子君と同乗し、高鍋へ着いたのが十時半。ある店でコーヒーと果物をとり、街をぶらついた。何冊か書物を買って、汽車の中での暇つぶしに思ったが、村には書店が一軒しかなく、何もよい本は見当らなかった。縮刷本の夏目漱石の「坊ちゃん」などが最上級であった。七月号の「我等」がもう到着していて、その中に武者先生の戯曲「新浦島の夢」があつたので一冊購い、宮崎線の車中で読み終えたが、「新しき村」の理想を説明したもので、「改造」の中的一篇「変な原稿」の戦争反対の小説とともに、価値の高い文学である。十二時に武者先生たちと別れて馬車を乗換え、午後二時に福島町駅に着いた。汽車は四時に出て、九時に吉松で乗換えて、夜の三時に大牟田で佐後屋君と別れた。

十三日朝門司着、下関に渡って急行に乗り、夜十一時に大阪へ着

くと、茶谷半次郎君が駅に出迎えてくれて、彼の家へ泊った。十四日に開発、福島、奥村の諸君が来訪した。午后京都へゆき、茶谷君が同行して内藤君の家へゆき、村田、喜多川、小島の諸君に会い、夕飯後に丸山公園に遊んだ。京都というところは大人へん繁華だが、どこか閑静なところがあった、東京とはちがひ、大そう気に入った。東京の日比谷は成金連中の花園みたいで、上野はまだいい方が、丸山よりは落ちる。寓居へもどると、東京の永見君が来ていた。十二時半に京都を離れ、茶谷君も大阪へ帰ったが、富田氏（富田碎花―訳注）訳のホイットマンの「草の葉」第一巻を贈られた。十五日午前七時に浜松着、竹村啓介君の親戚の家に休んで河采君に逢う。十時の夜行に乗り、十六日朝六時半東京駅に到着、長島豊太郎、佐々木秀光、今田謹吾の諸君が出迎え、休憩室で少し休んで、午後六時に支部に集まる約束をした。私はまず巢鴨の寓居へゆき、夕方電車で神田大和町に「新しき村」の東京支部を訪う。参加者は上記の諸君のほか、木村、西島、宮阪、平田、新良の諸君ですべて十二名、九時に散会した。全部で十日間、「新しき村」の本部と幾つかの支部をざっと歴訪して、甚だ草々であるが、ほぼ大体をつかめたといえよう。「一切の和合の根本は、互いに知ることにある」と Bahaulah (Bahau' Alla―訳注) がいったが、この言葉は真実である。「新村」の理想はもとより優美に充ちていて、人を自然に嚮往させるが、もしさらにこの地にゆき、この住民を見れば、十分考察せずとも、自覚的に相互理解できる、これはもともと好意を懐

いている人達がそうだというばかりでなく、たとえいろいろな意味での敵対者の者でも、もし互に知り合えれば、同じく各地に住む人類の一部分であり、各々人間の好処短処はもっていても、理解し合えないわけではない、そして多くのいわゆる罪悪と災禍を省くことを知るはずである。私のこの度の旅行は、何か得るところがあったとはいえないけれども、思想の上でこれに因り少しく陰暗の影を掃い去り、自分の理想に対して若干の勇氣を増した。こうした利益を受けたことは感謝すべきである。それゆえ個人的には非常に満足してこの一篇をしたためて記念とする。しかし表現力の不足で私の印象を完全に伝達できないかも知れないのを自ら愧じる次第だが、これはすべて私の責任で、これに因って「新村」の真相を誤解してはいけない。』

当時の若い世代にかなりの熱狂者を持ったという一例ともみられるが、旧制五高の学生が訪問して、彼らに混って周作人も鋤を持ち、汗を流し、麦飯を頬張って、労働の愉悅にひたっていたという。しかし半時間もすれば腰が痛み、ロダンの岩のほとりで美しい自然石を拾って鑑賞する、それが中国の一人のインテリが、共鳴者としての限界ではなかったろうか。しかし周作人はここで、中国人間で旧くから持っている県人意識の狭量さを反省し、他国の人民同志は必ず協調しうるものと悟る。「村」に入っのち、「敵国貴邦」というやりとりはもうなかったというが、「敵国」とは自分の国を卑下していい、相手の国を尊敬して「貴邦」と称する。もうそういった他人



行儀はなかったらしい。だがやはり周作人は遠来の客、優待はされたが、野良仕事の最中は、そんな差別感すらお互いに感じなかった。周作人は故郷の紹興の田園を思い起し、久々に異国に居るということを忘れたようである。周作人にとっては、北京だって紹興に比べれば異国であったかもしれない。周作人は魯迅よりずっと強く故郷を愛していたように筆者には思える。

武者小路と周作人との文人的交流は別離の間に現われる。記念のための植樹は風雨に妨げられ、その代りに文字を書いて残す。周作人の胸中にはやはり陶淵明の詩があったが、ちょうど武者小路の手もとに「論語」があって、その中から選んだ文句を書いている。

つまり「述而篇」から「子曰く、仁遠からんや、我れ仁を欲すれば、斯に仁至る」と、「顔淵篇」の「子曰く、内に省みて疾しからざれば、夫れ何をか憂え、何をか懼れん」の両句である。ちょうど「耶蘇と孔子を研究していた」とあるが、武者小路はその年の八月から雑誌「新しき村」に「耶蘇」を連載しているのである。

十日に発つつもりが疲労もあり、居心地もよかったので十一日になる。七日に着いて十一日までで、武者小路は「三晩か四晩泊った」（昭十九「周作人さんとの友情」といい、周作人もこの記録の冒頭に「四日間」というが、実は四泊五日がその正確な滞在期間である。

十一日に松本君とともに出発したが、また雨に祟られる。しかし雨の中を、武者小路、房子夫人、喜久子さん達が高城まで送ってくれたらしいが、山上から「新しき村」を見おろして惜別している。現

在展望台ができてくるのがそのあたりであろうが、その時増水していた小丸川の景色は、ダムで水を湛えている現在の姿とある程度似ているかもしれないと筆者は思った。しかし今は周囲の木立に囲まれた中に、禿げたように一部分畑の土が見渡されるだけ。例のロダンの岩も堰堤のコンクリートの下に没してしまっているようで、その蝦蟆型の尖端すら見ることはできない。周作人はそのときまた雨の山路をやっとの思いで高城へ出て、再び深水旅館に泊らざるをえなくなる。旅館の二階からみると「橋桁の流された木橋がみえた」とあるが、いまは立派な鉄橋があって、昔の面影とてない。

高鍋の本屋で「我等」という雑誌を買っているが、これは大正八年二月に創刊された総合雑誌で、当時大山郁夫が編集していたものである。当時の日本のブルジョア・デモクラシーに、周作人も大いに関心を寄せていた証拠ともなる。

高鍋で武者小路と別れて馬車を乗換え、また福島町駅に出て、帰路につく。この福島町駅の名は武者小路によると、「木花咲耶姫このはなさきやひめの古墳から妻という名のついでに町」（周作人さんとの友情）となっているが、現在「妻」という名の駅は佐土原町から支線で山へ入っているから、周作人のいう福島町駅とどこで一致するのか、筆者の今回の旅では究められなかった。

最後の部分に出てくる Bahauilad は周作人の思い違いか、ミス・プリントか、注に入れておいた綴りが正しいと思う。このような間違いはほかにもあって、「村」人の萩原という人が萩原となってい

る。これは杉山正雄氏に証明していただいたが、バハーウッラーの場合も松枝茂夫氏を通じてヒントを与えられ、調べてみた結果、合点がいった。これはイスラム教の改革運動たるバーブ教の教祖の名であった。義兄との決裂などあって苦心の末、近代のヒューマニスティックな新宗教を興した人物だし、これもまた周作人の好みに合っているはずである。

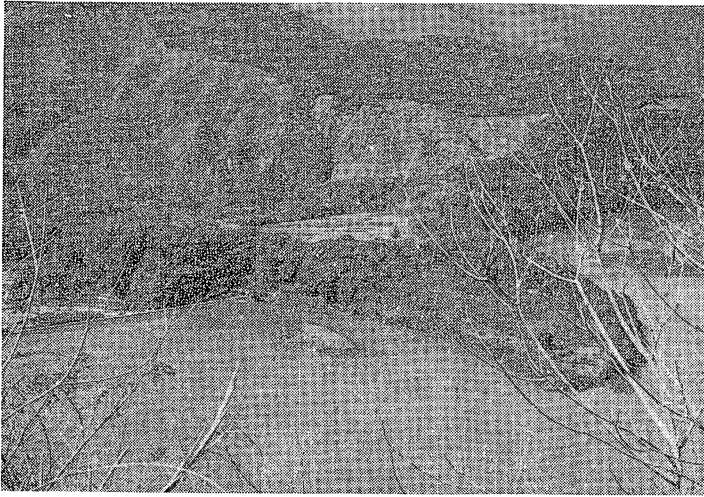
帰路にいくつかの支部を廻って、東京支部での集会に出てから、七月の三十日に東京巢鴨村の寓居でこの旅行記を書いた。これに前後して幾篇か「新しき村」に関する文章はあるが、実際に周作人が「村」を訪れたこの記録の中に、彼の傾倒した心境が素直に現われていそうに思える。資本主義者でもなからう。だが社会主義者でも

ない。第三のもの、人間主義者、周作人はやはりその「或る男」ではなかったか。

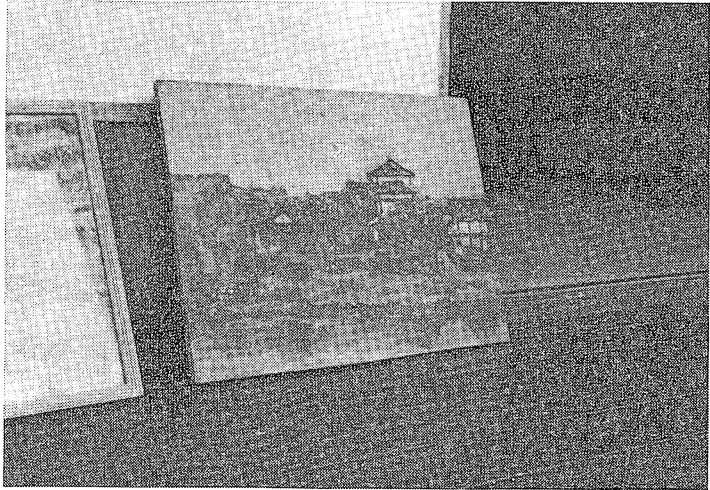
かつて一中国人がわざわざ「新しき村」を訪ねた記録の紹介も意味があらうと全訳したが、筆者の気まぐれな旅の所感と交錯してこんな貌になってしまった。武者小路の発端の火を思い、惹かれていった伊藤信吉氏の「ユートピア紀行」（昭四十八、講談社）などに比べると申訳なくも思うが、筆者は筆者なりの収穫を得たと思ってる。ただご面倒をかけた杉山正雄氏はじめその他のかたがたに心から感謝申上げる次第である。

昭和五十年八月稿

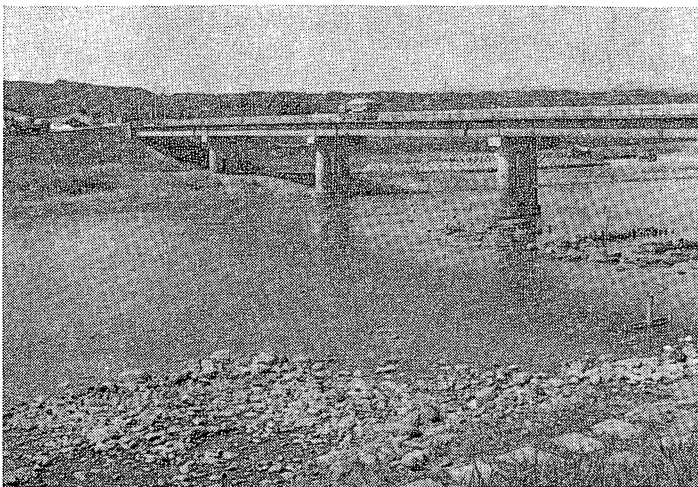
現在の「新しき村」  
俯瞰

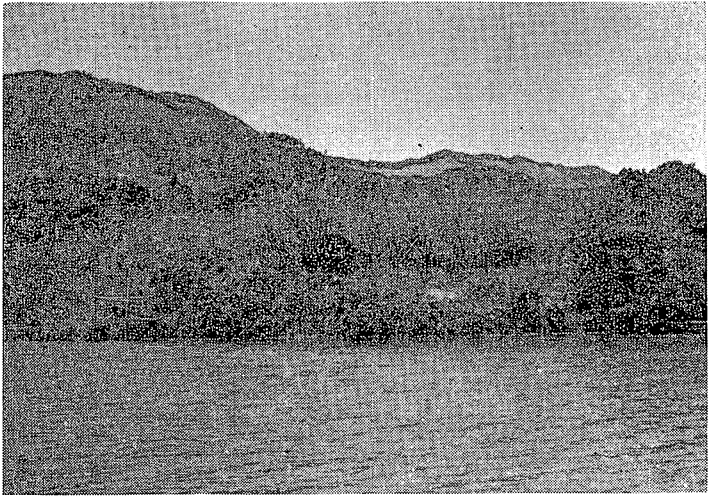


川島伝吉氏筆の  
当時の深水旅館



現在の小丸川  
この石の出ているあたりに  
深水旅館はあったという



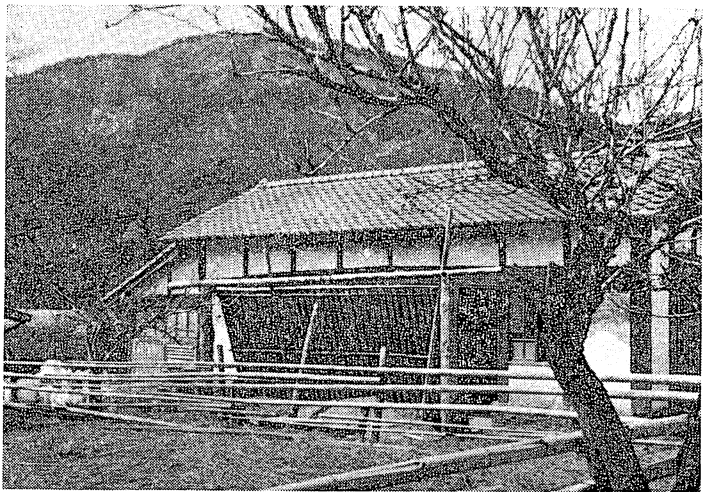


石河内村・城・全景  
このダムの水底に  
「新しき村」の大半が沈んだ

『新しき村』への道（飯塚）



現在の「新しき村」  
近景



ここに現在  
杉山正雄氏  
武者小路房子氏  
住む